

『古今和歌集』
春歌上 四五〜四六番歌

【四五番歌】

家にありける梅の花の散りけるをよめる つらゆき
暮ると明くと目かれぬものを 梅の花 いつの人まに
うつろひぬらん

〈校異〉

- ・ありける…はへり（筋切・元永本）
- ・よめる…みてよめる（基俊本・私稿本・毘沙門堂註本）
- …ナシ（筋切・元永本）
- ・目…あ（龜山切）
- ・ぬらん…にけん（静嘉堂文庫蔵為相本）

…にけむ（筋切・元永本・家長本清永二年・穂久邇
文庫本清永二年・天理図書館本本願昭・伏宮
本本願昭・高野切・関戸本）

〈語釈〉

- ・家…『古今集』では題詞には「家」を歌には
「宿」を用いる（『新全集』）該当歌として、
一二〇、二三七、八四八、九八五、九九〇番歌
が挙げられる。
- ・つらゆき…茂行の子。貞観一四年（八七二）〜天慶
八年没（九四五）か。
- ・暮ると明くと…日が暮れるにつけても見、夜が明
けるにつけても見。（『新全集』）

「暮る」「明く」共に終止形（『片
桐全評釈』）

- ・目かれ…対象から目が離れること、見なくなることに、
会わないでいること。（『日国大』）

- 佐保過ぎて奈良の手向けに置く幣は妹を目離れず相
見しめとぞ 『万葉集』（三・三〇〇）

- 思ふ糸に逢ふものならばしましくも妹が目離れて我
れ居らめやも 『万葉集』（一五・三七三〜一）

- 目離るとも思ほえなくに忘らるる時しなればおも
かげにたつ 『伊勢物語』（四六段）

- 思へども身をしわけねば目離れせぬ雪の積るぞわが
心なる 『伊勢物語』（八五段）

- ・人ま…「人の見ぬ間と言ふなり」（顕註）（『新大系』）
人の見ていない間（『新全集』）

- ・うつろひ…「移ろふ」は色があせること、または散る
こと。ここでは題詞の関係から後者に解釈
する。（『新全集』）盛んな状態から衰えた

状態になること。（『片桐全評釈』）

- ・らん…推量の助動詞「らむ」は現在推量・現在の伝聞・
現在の婉曲の意味があるが、詞書に「散りける
をよめる」とあることから、「けむ」と過去推量
の伝本が多数あるが、本研究会では現在推量と
する。

〈通釈〉

家に植えた梅の花が散るのを見て詠んだ歌 貫之
暮れても明けても、絶えず目を離さずに見ていたこの梅の
花は、人の見ていない間に散ってしまったのであるうか

【四六番歌】

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた よみ人しらず
梅が香を袖にうつしてとゞめてば 春はずぐともかたみ
ならまし

〈校異〉

- ・のうた…に（筋切・元永本・雅経筆本崇徳天皇御本）
…ナシ（基俊本・書陵部蔵永暦二年俊成本）
- ・が…の（雅経筆本崇徳天皇御本・家長本清永二年・前田家
本清永二年・穂久邇文庫本清永二年・天理図書館本本願昭・
伏宮本本願昭・高野切・寸松庵・私稿本・関戸本）
- ・うつして…つつみて（穂久邇文庫本清永二年）
- ・とゞめてば…とめたらは（筋切・元永本・寸松庵）
- ・ならまし…とおもはん（六条家本）
なるへし（私稿本）

〈他出〉

寛平御時后宮歌合三五 新撰万葉集二一「片身砥将思」
古今六帖 五 「袖にこきいれてとめたらば」

〈語釈〉

- ・寛平の御時きさいの宮の歌合…
班子女王（宇多天皇母后）主催の歌合。ただし、この
「后宮」は主催場所を示したもので宇多天皇主催の歌
合という説もある。寛平五年（八九三）九月二五日記
載の『新撰万葉集』上奏本文から本歌合はそれ以前に
成立したと考えられる。（『和歌大辞典』）
- ・よみ人しらず…

『寛平御時后宮歌合』から『古今集』の成立までは一八
年しか経ておらず、作者が「よみ人しらず」とあるのは
なんらかの事情により表記を伏せたと考えられるが、
『寛平御時后宮歌合』が撰歌合であり、既に詠まれてい
た旧歌を選んでいたのであれば、「よみ人しらず」でも
問題ないことになる。（『片桐全評釈』）だが、作
者が身分の低い女性等であればこの令の限りではな
い。

- ・とゞめてば…「て」完了の助動詞「つ」の未然形
「ば」未然形付いて順接の仮定条件を表す

・かたみ：過去のこと、また、別れた人や死んだ人を思

い出す手がかりとなるもの。

○ま草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ
来し 『万葉集』（一・四七）

・ならまし：「なら」断定の助動詞「なり」の未然形

「まし」推量の助動詞（反実仮想）

事実としてありえないが事実であることを望む意

〈通釈〉

梅の香りを袖にしみこませてとどめてしまったのなら
ば、たとえ春が過ぎても思い出とすることが出来たであ
ろうに

【配列】

44 年をへて花の鏡となる水は ちりかゝるをやくもる
といふらむ

45 家にありける梅の花の散りけるをよめる つらゆき
暮ると明くと目かれぬものを 梅の花 一つの人ま
にうづろひぬらん

46 寛平の御時きさいの宮の歌合のうた よみ人しらず
梅が香を袖にうづしてとどめてば 春はすぐともか
たみならまし

47 ちるとみてあるべきものを 梅の花 うたてにほひ
の袖にとまれる

四十四番歌では視覚上において眼前にある「梅」
は、四十五番歌からは「散る梅」としてその姿形をさら
さないが、当時の王朝人達は、もっぱら梅の花そのもの
ではなくその芳香を惜しんだようである。松田武夫は
『古今集の構造に関する研究』において、「梅花はその
かをりに愛着の中心がおかれるので、（中略）梅花が散
る場合でも、その余香が問題となり、過ぎ逝く春の一つ
の形見として、これを眺めるに到る。」と指摘し、「か
をり」が「梅の主題」であるとしている。

参考文献

『古今集校本』 笠間書院

『新日本古典文学大系 古今和歌集』 岩波書店

『日本古典文学全集 古今和歌集』 小学館

『古今和歌集全評釈』 講談社

『伊勢物語』 講談社

『古今集の構造に関する研究』 風間書房

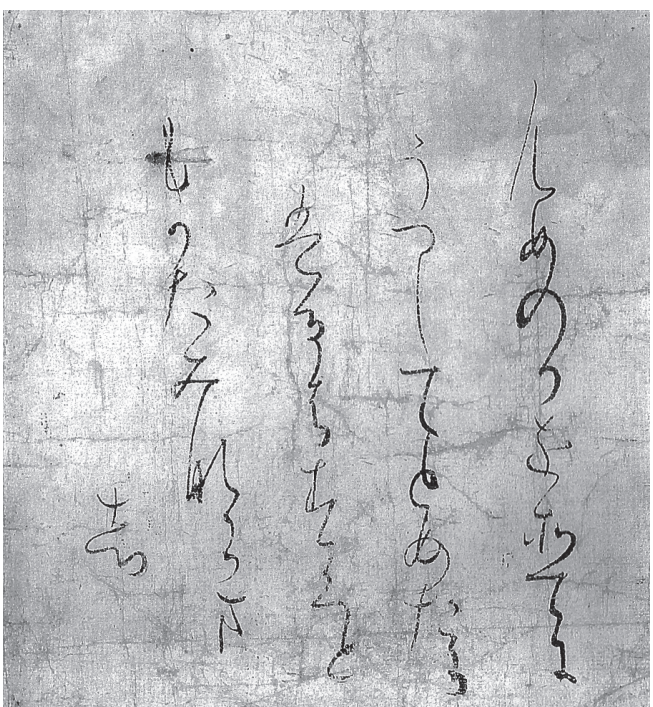
『和歌大辞典』 明治書院

『新編国歌大観』 角川書店

『日本国語大辞典』 角川書店

【伝紀貫之筆 寸松庵色紙】

東山記念館蔵



（縦13・3cm横13cm）

天 無
所 可
尔 めのかをそてに
うつしてとめたら
是 難 春
者 是 はずすと
可 那 万 もかたみならま
し 志

名称……………佐久間将監正勝が建立した寸松庵に由来

装丁……………色紙ではあるが、元は粘葉装の冊子本

書写年代…十一世紀中頃

料紙……………白・藍・橙・茶白緑などの具を引き、唐草、亀

甲、花禪などの文様を刷りだした船載の唐紙

現在伝存するのは三十二葉。書写内容は『古今集』の四季
歌を抄出したものであり、伝藤原行成筆「粘葉本和漢朗詠
集」と同種の紙であることから十一世紀中頃の書写と思わ
れる。

伝本系統として、久曾神昇の分類によれば、詞書きの未整
理なことから「基俊本」「亀山切」等と同じ再撰本の中の第
一次公稿本に位置する。

また、二行目の末の「は」は誤脱とされていたが、石川九
楊は「は」の字が二重化した「掛字」として「掛詞」と同じ
ような働きをしていると指摘する。

参考文献

『古今和歌集成立論』 風間書房

『古筆学大成 古今和歌集』 講談社

『國文學』 解釈と鑑賞の教材 五十三卷第十号 學燈社